

スリランカ交流旅行 感想記

— 2010年交流団参加者から —

発行日：2010年11月6日

発行人：国税庁認定 特定非営利活動法人
C.P.I.教育文化交流推進委員会

この感想記は、記述者から、当会の使用に限り掲載を承諾して戴いています。
許可なく転載することを禁じます。

スリランカ里子交流の感想記

アユボワン・スリランカ

三重野 英子

スリランカ里子交流ツアーへは、2回目の参加でした。昨年、初めて子どもたちに会い、その後文通を通して、子どもたちの生活の様子がわかるようになりました。出産や家族のけが、病気などの心配ごとをかかえながらも懸命に暮らしている様子を知り、もう一度訪問することで、元気な顔を見たいと思いました。昨年、身重な体で会いにきてくれていたアランガは、かわいい女の子の赤ちゃんを抱いて、ご主人と一緒に会いにきてくれていました。昨年事故にあわれたご主人のけがも回復し、仕事もできるようになったと言っていました。少しゆとりが感じられるようになった顔を見て、安心しました。

もう一人の里子は、当日、OLレベル試験があったため、少し遅れてお母さんと一緒にやってきました。試験は、難しかったと言いましたが、一生懸命取り組んだ満足感が感じられる表情でした。

今年は、妹と一緒に参加しましたが、私の家族に会えたことも、とても喜んでくれました。再び訪問することができて良かったと思いました。昨年同様、通訳の方がついてくださり、お互いの気持ちを伝えあうことができました。お世話をしてくださった方々に心より感謝いたします。



里親になりたいと思ったスリランカツアー

三重野 優子

姉の“ホテルが素敵よ”という言葉で、里親ではない私ですが、参加することにしました。皆様は「里子との交流」という目的があるので、“観光は二の次よ～”、と自分には言い聞かせていましたが、世界遺産を5つも廻り、優雅なホテルライフもあり満足、々。

歴史ある遺跡や寺院はもちろんですが、人々の笑顔、特に子供たちのかわいさ。目の輝きがとても印象的でした。それから緑一面のお茶畑。あんなに広いお茶畑はみたことなかったです。驚きました・・・。

拙宅で、おいしい紅茶をせっせと頂きながら“里親になる方法を聞こう！”と、思い始めた旅でした。お世話下さった牟田さん、ご一緒した皆様、とても有意義な楽しい旅をありがとうございました。



平和になったスリランカの印象に驚き

中林 遼太

今回、私がスリランカ里子交流ツアーに参加したのは、普段から海外旅行をしている私が、両親の代わりに、両親が支援している里子に会いに行くためでした。

私はこれまで東南アジアを中心にいろいろな国を旅行してきましたが、スリランカのこれまでの印象では、内戦が激しく、政治・国内情勢が不安定で、とても旅行でいける場所ではありませんでした。しかし今回スリランカに行ってみて、安全などに関しては不安に感じることはまったくありませんでした。

気候的にも、暖かい地域の気温も最近の日本のようなじめじめした蒸し暑さではなく、からっとした暑さなので、日差しさえしのげればとても過ごしやすく、標高の高い地域では一日中涼しく過ごせました。また街や田舎に住んでいる人たちの様子も、アジアの他の国とあまり変わりなく生活していました。

今回の旅行の行程の中で、農村と街の生活を身近に見学できたのは、ふだん個人で旅行している限り見るできない場所だったので非常に面白い体験ができました。



また、会うことのできた里子のうち、現在支援している高校生の里子が、インターネットやメール、携帯電話を使える状態にあるということで、初日にセンターで会った際にアドレスを交換し、別れてからも私がスリランカ国内にいる間、メールや携帯電話で連絡を取り合うことができました。さらに日本帰国後も直接連絡を取り合うことができるようになったことは、今回スリランカに行って一番よかったことです。

里子たちとの交流は、お互いの年齢が近いこともあり（以前支援していた里子 24 歳、現在支援中 17 歳、私が 22 歳）はじめは通訳を介しながら話していましたが、通訳がいなくなってからも、なんとなくの英語でお互いにあまり気を使うことなく、現在私が通っている大学のことや、今の日本の学生の生活など色々なことを話すことができました。ただひとつ問題だったのが、交通費を渡す際に、歳が近いことでお互いに気を使い、なかなか渡せませんでした。

同年代の私から現金を渡すのはこちらも気が引けます。

今度スリランカに旅行で行くときに彼の家泊めてもらうための、ということで、何とか渡すことができました。

今回の旅行は、実際に私が里子を支援しているわけではないので、里子に会いに行くというよりは、今度個人で旅行に行ったときにスリランカで助けてくれる友人に会いに行ったようなものでしたので、とりあえずの私の目的は達成でき、大変よい旅行になりました。

近いうちに一人でスリランカに行ける目標ができたので、とりあえず自分の学業を何とかしながら、時間ができたらスリランカに行きたいと思います。

三年ぶりの再会ができました

鈴木 喜久子

酷暑の日本を離れて、コッテの朝の礼拝は心の中もすっきりする気持ちよい時間だった。

背丈が伸びてたくましくなった最初の子イスル(23歳)を、大勢の中でもすぐ見つけることができた。三年前に会ってからは、メールをとおして彼の学生生活を知らせてもらい、真剣に励んでいることを聞いていた。9月から大学の最終学年に優秀な成績で進級できることを知り、彼の健康と努力を毎日祈ってきた私は嬉しかった。医学を学ぶ彼は最近の成績の結果で、小児科を念頭に置きながら興味の対象を広げ、これからの一年間で進路希望を絞りたいと話してくれた。また、社会人になったら今度は後輩に奨学金を出せるようになりたい、と話してくれた。

英会話ができない私は、通訳の方のお蔭でなんとか楽しい会話を進めることができた。二人だけの時

は、身振りと筆記、辞書を片手に笑顔と笑顔で飽きることのないよい時間をもつことができた。

私のもうひりの子カスン（14歳）は最初の面会日にはラグビーの試合があり、最終日に会うことになっていた。試合に勝ち続けた結果、最初の面会日が決勝戦と重なったからだ。最初の面会日に都合がつかない子のために、センターでは滞在最終日にも時間を作ってくださいました。センターの皆様感謝しながら、そのときを楽しみにしたのだが、残念ながらツアーの移動時間が遅れてしまい、とうとう会えなかったことを、心から残念に思う。

ツアーの最終日の帰国前にセンターまで会いに来て、彼らの帰宅のバス時間ぎりぎりまで待つ

てくれていたイスルとカスンに、「ほんとにありがとう、そしてごめんなさい。」と伝えたい。

センターでの二人の間には、日没で薄暗くなっていく中、何時着くか分からない里親を待ちながらの、同じ里親をもつ者同士の親しい会話があったと、信じる。



初めての夫婦の旅に、輝ける島スリランカの里子を訪ねて

葛西 恒平・征子

初日にSNECCを訪問。まずは事務局長で僧侶のチャンダシリ師から祝福の読経と聖糸を戴いて、感激しました。ここから旅が始まりました。

私たちにとって2人目の里子セウワンディは、センターの石段のいちばん前に立って迎えてくれました。「セウワンディ？」と問うと、恥ずかしそうに笑みを浮かべてうなずきました。彼女は私たちの里子になったばかりの13歳。4人姉妹の末っ子は、お母さんといちばん上のお姉さんと3人で会いに来てくれました。初めはややぎこちなかったものの、少しずつ打ちとけてゆき、メモ用紙に家族の名前を書いてくれたり、文字を見ただけではどんなふうにか書くのか皆目見当がつかなかったシンハラ文字の書き方を教えてくれました。将来は法律家になりたいとのこと、賢そうな瞳が輝いていました。

今回の旅の有能なガイド、ナンダさんの通訳で始まった彼女たちとのやりとりで愉快だったのは、お姉さんの質問です。桜が前面に写った冠雪の富士山の絵葉書をすでに送ってあったのですが、それを見たのでしょうか、「雪って、どんなものですか」と、こちらに身を乗り出すようにして問うてきました。雪が降ることのない国の子供たちに、雪というものが分かってもらえるように、これからの文通でどこまで説明できるか、私たち2人に課せられた宿題になりました。別れ際、セウワンディが私たちの前にひざまずいて礼拝してくれたのには、

驚き、そして、それはこの仏教の国では親への感謝の行為と聞かされ、感動しました。

センターでの里子たちとの面会、そして歓迎のステージがオワッテ、翌日から仏教遺跡めぐりの旅が



始まりました。私たち夫婦にとって、2人揃っての初めての海外への旅でした。

12, 3年前に、アルボムツレ・スマナサーラというスリランカ出身のお坊様に会い、以来お釈迦様の本当の教えを学んでいます。一人の師との出会いによって、それまでほとんど地図上で見る国名でしかなかったスリランカが身近なものになり、いままた里子たちとの出会いによってより一層親しいものになりました。聖跡を訪れ、座って静かにお経を唱える人びとの群れ、ストゥーパの傍らで瞑想するお坊様たち、一筋の川の流れるようにどこまでも、どこまでも連なっていく巡礼の女たち……。

夕闇を濃くしていく空、ルワンウェリ・サーヤ大塔の上に強い光を放って木星がまたたいていました。

旅の途次、若い漁師の家に立ち寄って、暮らしぶりをみせてもらった印象も、強く印象残っています。

CPIの、この企画がなかったら、スリランカを訪れることはなかったかも知れません。

チャンダシリ師はじめSNECCの皆さまのあたたかいおもてなし、同行の方たちとの折に触れての語り……。道中の様々な悲喜劇(?)に、笑いの絶えなかった8日間の旅でした。

そこにいつも牟田スマイルがあったことも忘れることができません。

皆さまに、感謝! 「生きとし生けるものが幸せでありますように」——これまでよりも、心のより深いところから念ずることができるようになった気がします。

スリランカの風の中で

曾根 由美子

今は、遺構となったシーギリア・ロックに立ち、緑豊かな平和な自然の中で、心地よい風に吹かれ…また、仏塔や菩提樹に祈りをささげる多くの敬虔な人々の姿に触れ…スリランカは、言葉にならない感動の旅となりました。

私の2人の里子は、りっぱに成長し社会人になっていました。まだあどけなさの残る10年前の写真を思うと、胸が熱く、会えたことが、ただただ嬉しく、お互い抱き合っていました。最初の里子(娘)は9月に結婚するとのこと。その招待状を手渡してくれました。

2番目の娘は、フィアンセを連れ、私に紹介してくれました。彼女達をこれからもずっと見守っていきたい。そして、もし、2番目の娘から結婚式の招待状が届いたら、また、光り輝くスリランカへと夢を馳せています。

最後になりましたが、ツアーの企画、運営を下さいました牟田さん、あたたかく迎えて下さったSNECC事務局長チャンダシリさん、センターの皆さん、日本人の気持ちを知り尽くした! ガイドのナンダさん、運転手さん、そして、そして、ツアーで一緒させていただいた皆さん、爆笑あり、助けていただき、たいへんお世話になりました。…スリランカの子どもたち、日本の子どもたち、すべての子どもたちの幸せを祈って…



輝ける島への熟年夫婦の同伴渡航

高原 信博

昨年に続き、今年も渡航することとなった。前年の内容の素晴らしさに「これなら、家内も大丈夫」と昨年誓いを立てた“家内同伴”を実現させて熟年夫婦旅行と相成った。

自己紹介の中で家内が「主人が迷惑をお掛けしています」のくだりでは、バスの中は大喝采。俺はそんなに迷惑をかけて来たのだろうか・・・、長旅に疲れた同行者の熟睡した顔を、証拠写真に取り捲ったのが不評なのだろう。皆さんごめんなさい、今年はまだ本人にしか配信しませんから。二日目スリランカ日本教育文化センターに行くと、里子の女の子が母親と待っていた、会うといきなり土下座をして私の足の甲に額を付けようとする。

感謝の気持ちの表れだろうが、そこまで偉くないと思い、慌てて両腕を掴んで立ち上がらせる。

その後たびたび現地人が僧侶に対して、そのような土下座風景を見ることがあったが、日本人には馴染めない習慣と感じた。(編集註：両親や僧侶へのこの行為は、お釈迦さまへの感謝とされている)センターまで来るのに5時間掛けて来てくれた母子は、やはり疲れているみたいだが、しっかりと質問に答えてくれた。交流会では、一番の人気は“折り紙”を披露しているコーナーに皆集中している。折り紙交流は、とてもよい、来年は、ベテランの指導者に同行をお願いしたいものだ。

午前中より対面を行い、4時半に親子を見送り夕方から歓迎式典が行われたが、我が交流団は、昨年の無芸とは様変わり、牟田さんのハーモニカと「三線・ギター」があり、最後は盆踊り「炭鋤節」で盛り上がった。歓迎会が時間的には2時間ほどで切り上げられ、ちょうどよい時間でした、それにしても新しい野外舞台よく間に合ったな。(編集註：8月初めから造り始めていました)

キャンディのホテルで近くの大病院の先生方と一緒にしたが、彼らが宿泊するようリゾートホテルを選定企画された事に謹んで敬意を表す。

来年もぜひとも見参致し、スリランカの輝きが増すよう頑張りましょう。



輝ける島への渡航人の、女房からのお詫び

高原 幸子

昨年スリランカへ渡った夫が「素晴らしいので今年はお前も是非一緒に」とのお誘い。この人は自分が経験して感動したりするとそれをすぐに周りに持ちかける、今年も私も渡航することとなった。

14年前のタイ旅行の折も、一週間ほどの旅程で帰ってきたらすぐに「一緒にタイに行こう」と、慌ただしく日程調整し旅立ったこともありました。前回の旅行でも周囲に迷惑をかけていたらしい。



一人団体行動を離れて、少しでも時間があると、土器や骨董品を買いに走る。今回スリランカで工房に行ったときも、昨年にも買い求めた白檀片について「いいものでなかった」と抗議して謝らせながらも、またその工房で仏像を買ったのには、呆れた。

ダンブッラの石窟寺院では屋台の骨董屋で金物を買って交渉したが、向こうも引かず、そのあげく、バスに乗りかけた私を引き戻し、千ルピー借りて支払いを済ませた。他人様から見ればなんとも慌て者の、チョイ悪おやじだが、これで結構趣味のほうの茶道具が増えているのが面白い。

旅程二日目にセンターに行くと、里子の女の子が母親と待っていた、可愛い娘さんで無口だけれど頭のよさそうな雰囲気だった。話を進める間に「先生になりたい」「国のために尽くしたい」などがわかり、この子のためにも奨学金を引き受けてよかった、この現実が解る為にも渡航して良かったと思う。「今年は5箇所世界遺産を回ったから、来年はあと2箇所行くぞ」とのたまっている能天気の主人の、思考のうち半分くらいは“人の為になる精神”があるのを良しとしましょう。

来年はスリランカでの教育里親制度発起25周年とか。主人が行きますが、皆様方再び迷惑をお掛けしますことを前もってお詫びいたしておきます。

母と、折り紙と、スリランカ

伊藤 恵美子

折り紙を教えてやって、と頼まれて参加した今回の旅行。

それなのに、近くなって「今日が山場」と兄からの突然の電話。夫と急いで母(93歳)の病室へと向かう。母は静かに眠っている。何でいまなの？と思いながら、一度はスリランカ行きをキャンセルした。しかし、その後は安定し、3日前に再度旅行に申込み。同居の姑(95歳)はショートステイへ預けた。

何かとあわただしい準備、母の写真・お数珠・折り紙・梅干・海苔など詰め込み福岡空港へ。

皆さんの顔を見てやっとなんとすると同時に気持ちが高揚。久しぶりの旅に心ウキウキ。台北、香港、シンガポールと降り立っただけでも嬉しかった。機内食も行きはほとんど平らげすぐに睡眠。滑り出し好調、二日目に里子交流のため現地センターへ。少々緊張する。お祈りから始まり、いよいよ子どもたちとの交流会。何と目が澄んでいて輝いていることか！まず圧倒された。一人ひとりが目的を持っていて一生懸命。C.P.I.のこと、活動の現状を知ることが出来た。活動されている参加者のみなさんに、まず頭が下がった。話も一段落、折り紙の出番が来た。

一枚の紙から限りなく広がる折り紙。言葉は通じなくとも誰とも友達になれる。皆さんと共有の時間を過ごすことができた。

夜の交流会、まず自然の中のステージがいい。ダンスには釘付け、海外で見る柔道の型、皆真剣すごい。牟田さん、船越さんの演奏これもまた拍手、最後の炭坑節これがまた曲と合わず(?)喝采。やれやれ。



内戦を終え平和が戻って1年、戦後生まれの私だが、見るにつけ聞くにつけ、大変な苦労があったろうと察する。巡礼の人々の列をまのあたりにして信仰の深さと平和の象徴を思った。

世界遺産にふれることができ、歴史の重みを感じた。よく歩いた。突風にさらされて登った。

360度の大自然、緑豊かな風景に心和んだ。

仏教国だけに、お坊様の姿の多いこと。「もうしばらくこの世で母の笑顔に出会えますように、そうしてそのときが来たら、静にお導きください」と祈った。

いつしか「世界が平和でありますように」も加わった。

紅茶畑は圧巻である。高所で空気が澄み、滝が幾つもあり水量が豊富、1枝3葉全て手摘、美味しいはず。八女茶にまみれて育った私だが、しばらく滞在したかった。

私の分家では和紅茶を生産している。娘がインターネットで緑茶、紅茶を販売しています。

『くま園』で検索してください。よろしく！ 脱線してすみません。

興味深深で過ごした毎日、自分にあつたカレーを探すのも楽しみ、豊富な食べ物、食べ尽くせなかったのが残念(?) 果物が美味しかった。太った。私には梅干、海苔の出番なし、しかし役に立ってよかった。

今回初めての参加で、C.P.I.を知ったこと、皆さんとの出会いで、財産がふえました。

関東の方たちとはもっと話したかった。

今後とも、何らかの形で支援できたらと思っています。皆さんお世話になりました。感謝。

追伸 帰宅早々に甥からのメールあり、9月1日からお婆ちゃんは食事が3食になり、「自分で食べる」と言い出したとのこと。祈りが通じたのかもしれない。

次は、ぜひ里親として参加したい

西山 政臣

初めての海外旅行です。オブザーバーとして参加させていただきました。今まで行った研修、旅行、の中で最高に充実したエクセレントのものでした。

スリランカ(セイロン)については30年ほど前、勤務先の近所にある英語塾の先生が、現地に友人がいて、日本のものに非常に興味があり、カレンダー等を送りに見えていました。「機会があれば、自分も永住したい所です。」と話されていたのを、思い出しました。

今回同行するにあたり、C.P.I.の里子交流ツアー担当の牟田さんから詳しい案内があり、海外旅行初心者の方も全てお任せで安心して参加できました。



事前に、宿泊するホテルの内容、現地の天候状態、紅茶についてインターネットにより調べる事ができた程度で、スリランカについての予備知識が全く無い状態でした。そのため、毎日がサプライズで、感動の連続でした。

最初にスリランカ日本教育文化センター(SNECC)で里子さんたちとの交流がありました。私はオブザーバーのため、高原さんの里子さんのところに同席しました。

彼女には、父親がいなくて、お母さん、弟と三人で暮らしていること。お母さんが縫製工場で働き、収入は月収6,000ルピー程であること。家には電灯はあるが、冷蔵庫もテレビも無いこと。センターに来るのに、夜中に出る一日一便しかないバスで出発し、5時間かけて母親とコロンボに到着したこと。等々胸が痛くなる話を聞きました。

(編集註：今回の、里子たちがコロンボに来る交通費は、交流団の皆さんに負担して戴きました)
別れるとき里子さんが里親の高原さんの足元にひざまづき頭をつけようとして、あわてて高原さんが制止した場面がありました。支援を受けている月々2,000円の奨学金が、彼女たちの大きな支えになっているのだと痛感させられました。

センターでは歓迎のセレモニーがあり、歌や舞踊で楽しませて戴きました。また、私達もステージに上り、牟田さんのハーモニカ・オカリナ、船越さんの三線(さんしん)、中林さんのギター演奏で盛り上がりました。

こういうときのために、何か一芸をもつべきだと反省したことです。

ステージが終わった後、暗くなったステージの奥の林の中に、たくさんのホテルの灯が飛び交って、いて、「ここには自然が残っているなあ」と、嬉しく思われました。

移動は全て、1999年にC.P.I.が寄贈したというマイクロバスで、メンテがいいので快調な旅行ができました。ガイドのナンダさんが、7の世界遺産のうち5か所を巡る今回のツアーで場所ごとに、スリランカについての歴史、宗教、生活習慣、気質等、詳細な説明と案内をしていただき感謝しています。

C.P.I.の旅行だったことで有難かった今回のサプライズは・・・

仏歯寺で、皆が通常入れない大統領の就任演説があった場所に特別に入れていただいたこと。

また、国会議事堂近くの軍が警備している慰霊碑で、皆に遅れた私がパスポートを見せても、銃をかざして入れてくれなかったのが、C.P.I.の名札を見せたらOKだったことでした。

果物もおいしく、車を停め完熟のマンゴースチン、ランプータン、果物の王様ドリアン等を、道路沿いの店で購入して皆で分けて食べ満足しました。お酒好きの私と数名は、毎日昼と夜の食事時ライオンビールを嗜んで、すっかりライオンビール党になりました。アルコール8%のストロングもありました。(スーパーでは、ライオンビールが100ルピー、コカコーラのほうが高く130ルピーでした)

まだまだ、いろいろありますが、数日して、マイクロバスの中で自己紹介をし、お互い参加者の思い、ひととなりを理解しあえました。中でも最後に、ガイドのナンダさんが、3歳の時父親を亡くし苦勞をしたこと。C.P.I.の皆さんの援助に感謝し、声を詰まらせられた事が、強く思い出に残っています。

最後に、参加されたそれぞれ皆さんの温かい思いが随所にあり、今回のツアーが非常に有意義なものとなりました。本当に有難うございました。

次回は、里親として参加できればと、思っています。

これから、スリランカの里親に参加して、もっと深い交流がしたくなりました

小川 武代

今年1月に スリランカに行くので一緒に行かないかとお話を頂き、海外は行ったことないし不安もありましたが、いい機会だと思い参加させていただきました。

C. P. I. のこと、里子の状況、スリランカの国のこと、何もまったく知識のないままの参加でした。一日目は、スリランカ日本教育文化センターで里子たちとの交流でしたが、お坊さんと子どもたちのお出迎えに緊張いたしました。これから1日どんなことをするのか、私は里子がいませんので何をしたらいいのかまったく分からず不安でした。でも、この旅の無事を祈ってお経を唱えて下さり、右手に白い糸を巻いてくださったとき 歓迎されてる気持ちがとても伝わってきて、不安が期待に変わりました。

里子との交流は、里子の家族の方ともっぱら会話を楽しませていただきました。英語もシンハラ語もできないのですが、子をもつ親の気持ちは、万国共通ようなので、気持ちは伝わったかなって思ってます。そして里子のみなさんがしっかり勉強して、その成果を見せてくれること、感謝の気持ちをいつも持つてあることに感心しました。

2日目からは象の孤児院や世界遺産をめぐる観光でした。行く先々での現地のかたの笑顔や遺跡のすばらしさ、スリランカの空気がなんともいえないエネルギーを感じました。

次ページの写真をみてください。厨房でお料理のお手伝いもしてしまいました。

パワースポットって言葉がありますが まさにパワースポットそのもので、スリランカから元気をいただきました。

それと、一緒にツアーに参加された皆さんから里親になった経緯や体験をお伺いすることもできました。皆さん、気負わずにされていらっしゃるのでお話を聞けてよかったです。

またスリランカの人たちが日本の活動にとっても感謝されてることも知ることができました。

このツアーに参加し、C. P. I. の活動が、スリランカのためになくはないものだと思います。

スリランカが大好きになってしまいましたので、私も里親となってもっと深く交流ができるようになればと思っています。



未知の国スリランカの印象

船越 麻美

今回スリランカ里子交流ツアーに参加させて頂いたきっかけは、友人の方に誘われてでした。

スリランカという国を何も知りませんでしたが、どんな国か興味があり、皆さんとは違い少々不真面目(?)な動機の参加でしたが、今回旅行に参加させて頂いたことにより、素晴らしいメンバーとの出会いや、もしかかもしれませんスリランカという国 について知ることができたのは、私の人生において大きな刺激になりました。

今回の旅行で一番印象に残ったのは、C.P.I. から援助を受けている子供達の勤勉さと素直さでした。スリランカの教育水準はとても高く、子どもたちは将来の夢や希望を胸に抱き、目を輝かせながらそれを話ってくれました。一生懸命に目標に向かって頑張っている姿は素晴らしいと思います。

英会話も小学一年生から習っていてC.P.I. の里子のところ以外の場所に行っても、子供がちが英語で気軽に話しかけてくるのには大変驚きました。英語の苦手な私はほとんど話せず困りましたが、英語を学習しなおす良いきっかけになったので良かったと思います。

スリランカの子もたちの姿を見ていると、物質的に恵まれていながら不満や怠慢、希望をもてないでいる日本の若者はかわいそうに思えてしまいました。全てが恵まれているから希望を見出せないでいるのは、皮肉な事だと思います。

スリランカは、敬虔な仏教徒が多く、どのお寺に行っても地元の人が多く訪れている姿はとても感動的でした。どちらかという多くの日本人(私も含めて)は、困ったときだけ仏様や神様にすがるのでいい加減な部分が多いような気がします。



スリランカの人々の慎み深い性格は、そういった素直な心や信仰心からくるのだろうと思います。

スリランカで二番目に印象に残ったのは、ご飯でした。どこに行っても本当にご飯が美味しく最高でした。全てがカレーのみとっていたのですが料理の種類も多くて、意外に野菜とスパイスを沢山使いヘルシーな料理でした。

普段は冷え性な私なのですが、スパイスの効果で旅行中は常にポカポカしていたのも意外な発見でした。

スリランカは、人も素晴らしく、文化も素晴らしい。食べ物も美味しいし、印象はとても平和な国といった感じでした。しかし、2009年の5月に内戦が終わったばかりという事実は、大きな衝撃でした。

イギリスの植民地時代を経て、他民族同士の対立のための内戦など、幾つもの大きな波を乗り越えて手にした平和です。このまま、民族同士の対立をせず、お互いの手を取り合い、未来を担う子どもたちのためにも、今、手にした平和をいつまでも続けていってほしいと思います。

